

下田歌子記念女性総合研究所 ニューズレター

No.13

2019年7月

創立120周年と、その先に向けて



理事長
山本 章正

実践女子学園は、近代女子教育の先駆者である下田歌子先生の「女性が社会を変える、世界を変える」という建学の精神の下、1899(明治32)年に創立しました。最初の入学者はわずか40名でしたが、戦後、中学から大学院までの一貫した教育組織を持つ女子教育機関となり、これまでに17万人の卒業生を送り出しています。

学園では創立120周年に向けて教育環境の整備に取り組み、大学の一部と短大を渋谷キャンパスへ移転、併せて中高体育館の新築や日野キャンパスの大規模改修を行いました。また、創立者・下田歌子先生の顕彰事業に取り組み、下田歌子記念女性総合研究所の設立をはじめ、学生・生徒への自校教育の充実、学園役員による墓参を毎年行ってきました。そして2019年5月7日の創立記念日には、下田先生の生誕地・岐阜県恵那市岩村町で、実践女子学園創立120周年記念式典を行いました。下田先生の原点ともいえる生誕の地で、その功績と学園創立への想いをあらためて確認し、多くの地元の皆様とともに記念の日を祝うことができました。「キャンパスは東京にあっても心は故郷」。これからも、岩村町と学園との絆を深め、下田先生の志を受け継いで参ります。

今後、少子化やグローバル化によりさらなる教育環境の変化が予想されますが、これまでの経営基盤の上に、成長に向けた改革を加速することで、学園を発展させ続けたいと考えています。「女性が活躍できる社会」に向けて、様々な制度が整えられつつありますが、まだまだ多くの課題が残っています。

女性の活躍への期待が高まる一方で、女性の生き方は多様化しており、女子教育が果たす役割は一層大きくなっていると思います。

私は、女性が社会で活躍するための重要な要素の1つは、本学園の名称に用いられている「実践力」であると考えています。下田先生は、創立当時、私立学校の多くが地名や創立者の名前を校名に使用する中で、あえて「実践」という名を付けました。学問や教養に加え、主体的に考え、社会で実践できる力を身に付けることが、自立した女性のために必要であるという強い思いを校名に込めたのです。それから120年経ち、私たちの暮らす社会は大きく変わりましたが、「実践力」は、今も、これからの時代にも必要な、大事な資質であると思います。本学園では、学生・生徒第一の基本方針のもと、学んだ知識を様々な場面で活かすことのできる「実践力」を持ち、不確実な世の中を「しなやかに」そして「たくましく」生き抜く女性を育成していきます。

下田歌子記念女性総合研究所は、創立者・下田歌子先生と実践女子学園の業績を検証するとともに、女性の社会的地位の向上に寄与することを目的とし、女性に関する学際的、総合的な研究を行っています。本学の建学の精神をふまえ、現在・未来において女性たちがよりいきいきと活躍できる社会の構築を目指し活動して参りますので、今後も関係各位のご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

(やまもと あきまさ 本学理事長)

創立120周年記念朗読劇

ことほぎ・コトホギ・kotohogi ～乙女らよ大志を抱け～



第1部門 客員研究員

関 登実子

2019年5月11日(土) 10時より実践女子学園中学校高等学校桃夭館桜講堂において上演した朗読劇「ことほぎ」。脚本・構成・演出は本学卒業生の初風緑氏である。岩村親善大使鈴木隆一氏、岩邑小学校、岩邑中学校、岩邑うた子会、岩邑醸造株式会社、中高父母の会の協力により上演に至った。創立120周年記念イベント「J-FES」の来場者の他中学校1・2年生が観劇した。

この朗読劇は、東京都私学教育研究所平成27・28年度研究協力学校として助成金を得て感性表現手法プログラム研究発表としての、音楽劇「ことほぎ・コトホギ・kotohogi ～見目麗しき花の如く～」の第2話として製作された。第1話は、生徒達と2年間に亘りレッスンや討論を重ねて、生徒と共にセリフや踊りを考えて上演に至った。第2話は、第1話を制作するにあたって生徒達と行った様々な交流や岩村を訪問したこと、第1話終了後に再び訪れた岩村での会話などから第2話への着想を得て、第1話から第2話の上演に至った経緯そのものを音楽劇とした。出演者は、第1話に出演した高校卒業生2名と昨年度下田歌子賞を受賞した岩村在住の中学3年生に出演を依頼した。

「今、あなた方はどのような21世紀を迎えているの



でしょうか?」「あなたの夢は、未来にどんな夢をえがいていますか?」「私があの日描いていた未来を引き継いでくれていますか?」「私の志はどんな形であなた方に受け継がれているのでしょうか?」「そう…私が描いていた夢…それは…」と下田歌子先生の声から始まった。進行役は“みどり”である。

【第一場】 卒業式下田先生の思い。本学園の卒業式は歌子先生作詞の送別の歌、告別の歌(かつては惜別の歌)が歌われる。その式のスタイルは特別な意味を持っている。みどりは120周年の学校案内「受け継ぐ伝統～未来をみつめて」のナレーションの収録で学園を訪問。女子の修養! 下田歌子先生の教えのもと、乙女の基礎を学ぶ、実践力を身につけ…多くの可能性が限りなくあることを学び、学生時代には気付かなかった思い、学べた喜びと感謝の気持が溢れだす。感謝の思いを伝えるために、岩村へ下田先生のお墓参りに、120周年に向けて、「ことほぎ」すべてはその思いから始まる。

【第二場】 岩村。下田先生の言葉。「お待ちしていました。あなたが必ず私を訪ねてくださることを。心よりお待ちしております。…この日がやっと来たのですね。岩村と渋谷を結ぶ列車。あの頃は、三国山をひたむきに歩き、志を夢ではなく現実で結んだあの頃をととても懐かしく振り返っています」と。

毎年中学2年生の移動教室では下田先生の墓参に訪れるとともに、岩邑中学校の生徒さんに案内をしてもらい交流を持っている。大学生も「学旅」で墓参に訪れる。下田先生のお墓

のお世話を岩村の方々がしてくださっていることを知る良い機会でもある。みどりが岩邑小学校、中学校を訪れると、下田歌子・佐藤一斎先生に学ぶ子供たちのまっすぐで凛とした姿、放課後の地元の方々との交流、伝統を受け継ぐ姿に胸を打たれる。

【第三場】 私の役割。岩村を訪ねたことで下田先生からのメッセージを受け取ることも多くなり、120周年をきっかけに今まで以上に渋谷と岩村…両方のますますの発展を考える大事な架け橋を作ることが私の役割なのかもしれない。考えているうちに台本はあつという間に書き上がっていった。生徒には2年間のワークショップでのレッスンを重ねてもらい、ことほぎ第一話見目麗しき花の如くを上演した。音楽劇は幕が下りこの年に第15回下田歌子賞の審査員として岩村に招かれた。

【第四場】 下田歌子賞朗読。時代とともに志は変わってゆくけれど、想いを文字に残す事…言葉にすることは、自分に責任を持つことになる。大切な事だと感じた。自分を大切にすることこそ、いくつになっても志を持つことは大事なのだとメッセージを受け取った。

【第五場】 歌子会との食事会。岩邑うた子会の夕食会に招かれ、岩村の歴史が残る岩村音頭が歌われた。うた子会の人々が、最近では歌い踊る機会がなくなってきたことを残念そうに語られ、みどりは岩村音頭を残すべき、伝統芸の継承は難しいかもしれないが、引き継ぐ心を育てるビッグチャンスかもしれないと心に強く思う。

【第六場】 岩邑音頭。下田先生の故郷の岩邑音頭、120周年を迎えたここ実践女子学園の講堂で本日復活。中学生から大学生が揃いの浴衣で岩邑うた子会の方々の踊る姿をバックに観客席と舞台上で踊りを披露。

【第七場】 昭憲皇太后百年祭。メイポールダンス・薙刀を明治神宮昭建皇太后百年祭で奉納。

【第八場】 女子の修養。下田歌子先生は女子の修養を通して乙女の基礎を学び学んだことは必ず実行するように、だれからも尊敬される知性を持つ女性を育成することを掲げて学校設立の目的とされた。

【第九場】 120周年からの学園の未来

120周年を迎えた学園に新入生が入学。生徒へ向かって下田先生は、「後輩は先輩に憧れを抱き、伝統を守り、助け合い。支えあい、実践力を身につけてほしい」「人からの評価を気にする前に自分を信じて自分で評価を」と。みどりは下田歌子先生が作られた実践女子学園中学高等学校の6年間を学べたことは誇りであり先生の志を多くの人々に広める役割があることを感じた。

下田歌子はこの学園にかかわるすべての人々へ、自覚と誇りを持ち、指導する側も学ぶ側も、120年のこの節目にもう一度襟を正し、自分の能力とインスピレーションに耳を傾け、教育の見直し、さらに未来へ向けて未来の学園がどうあるべきなのか一人一人が考えるチャンスにしてほしいと語る。

【エピローグ】 常磐の松に誘われて 見上げた緑さわやかに 澄み切った空 白い雲 柔らかな風 その風の囁き懐かしく さらなる八島に気高き希望を抱き 今実践の時 今羽ばたく時

【フィナーレ】 花は咲く+校歌のコラボレーション。校旗が舞台中央に運ばれる。

教職員、学生生徒、卒業生をはじめとするたくさんの人々のお力を得て創立120周年に音楽劇、朗読劇ができました。輝く未来121年へ向けて一步を踏み出しましょう。(せき とみこ 本学園中高教諭)

ポスターは大学国文学科3年生の黒田 莉璃圭さんの作品。

【黒田さんの感想】

ことほぎのポスター制作を一任していただいた時、一足先にことほぎの台本を拝読しました。しかし、初風さんの実践に対する情熱とそれに比例する重厚な内容から、初読では上手く解釈できず、何度も読み返しました。

何度か読み返し、頭に浮かび上がったイメージをポスターに落とし込みました。紫のシルエットは下田歌子先生と現在の実践女子学園の生徒であり、その2人を囲むフィルムは実践女子の過去と未来を繋げています。



「新選家政学」を読み解いて感じたこと



第2部門 兼務研究員
数野 千恵子

生活科学部の数野千恵子と申します。専門は調理科学で、調理をする時に起こる様々な現象の解明などを研究対象としております。本学では「調理学」、「調理学実験・実習」「フードコーディネイト論」などを担当しています。

実践女子大学下田歌子記念女性総合研究所には、食生活科学科の一員として参加させていただいております。下田歌子著作「新選家政学」で、食物関連の部分を読み解くという課題に参加させていただき、下田歌子先生が食べ物について非常に先見性があり、当時の最先端の考えをもとに教育をされていたことに驚きました。

創始者下田歌子先生の先見性

理念の一つでもある女性の社会進出や地位の向上は、現在にも通じる重要なテーマです。

下田歌子先生は飲食に関しても鋭い洞察力を持っていました。「新選家政学」を拝読すると、現在にも通じる内容で食品の栄養価にも関心を持ち、食べ物の選定方法、調理方法、保存方法などの他に衛生面に関しての記述が見られます。「大切なことは家族の健康を第一に考え、栄養価が高く消化しやすい食品を選ぶことが必要である。しかし、栄養価が高いものを選ぶのは良いとしても、収入を考えないで高価なものを買う必要はない。食材の選び方は重要で高価なものでなくても調理によって美味しくすること」など各内容も的確に述べられています。

食べ物の選択

食べ物の選択に関しては①日常の食事や来客の時でも、まずは予算を考える。②食品は時期や産地、新鮮さによっては味が異なり、値段が大きく違う。調理の仕方で良くも悪くもなるので、食品の選び方、献立、取り合わせなど日常熟練しなければならないと述べています。

各種食材の特徴を述べていますが、これは現在の食品成分の分類とほぼ共通した分類であり、明治時代に食品をこのように分類していたことは最先端の学問であったことが推察されます。さらに肉類についてはタンパク質

が多く、脂肪、無機質が適度にバランスよく含まれており、おいしいので好んで食べる人がいるが、過食を控えることの大切さも説いています。

献立については「予算金額の範囲内で栄養のあるもの、消化の良いもので、おいしく、色、形、配合も心のこもったものを膳に並べて心地よく感じて、食欲を促すようにすることが必要である」と述べています。そのほかに調理法や貯蔵法にも言及し、当時としては最先端の内容であり、現在のものの原点になっているのではないかとと思われる記述が非常に多く記載されています。

美味しいものをさらに美味しく食べるための工夫など、現在のフードコーディネイトの考え方に通じ、時代背景は変わっても基本は同じであることを改めて感じました。

現在の教育と社会での活躍

実践女子大学では、女性のキャリアデザインの創設をサポートし、キャリア形成の一助とするべく方向性があります。実際に在学生にそのような力を養成するためにはどのようにすべきかについては、実際のところこれからと思います。

現状としては各学科共に、専門知識をいかに身につけて卒業させるかで、日々を送っています。私の所属する食生活科学科においても従来「女性キャリアセンター」の成果を踏まえ、その成果をどのようにして在学生に反映させるのかを考える時期ではないかと思います。食生活科学科はどの専攻においても、知識の伝達・普及に力点を置き教育をしてきました。しかし、社会では各専門性をしっかりと身につけた人材とともに、社会性のある人材、物事を的確に判断できる人材を求めています。女性が社会進出をするためには、知識の他にそれを応用できる人間力のある人材を育てなければ本来の社会進出はできない可能性があります。

それは授業だけで身につくとは思いません。全教員が問題意識と方法を共有し、真剣に取り組む必要があると考えます。

それには現在の女性の社会的地位の向上について、具体案を提示する時期に来ているのではないのでしょうか。さらに下田歌子記念女性総合研究所では、今までの成果をもとに、目的を達成するためには、各学科がどのように学生を教育するかの方策の検討も必要になってくるのではないのでしょうか。（かずの ちえこ 本学教授）

米国・ベイパス大学 (The American Women's College of Bay Path University) との共同授業



兼務研究員
湯浅 茂雄

現在、2019年度前期共通教育科目「オープン講座c」として、実践女子大学と米国・ベイパス大学(TAWC)との共同授業が実施されているところである。すでに、本年3月には本学学生6名が、ベイパス大学(マサチューセッツ州、ボストン近郊)を訪れ、8泊9日で研修を行った。本年度は、その逆で、ベイパス大学の学生と教員(学生5名、教員1名)が6月16日～23日の日程で本学を訪問し、「異文化間における女性リーダー比較」のテーマに取り組み、研修を行っているというわけである。このテーマに関する研修の一環として、6月19日(水)、渋谷校舎(603教室)3限の時間帯で、実践女子学園の歴史と下田歌子についての講義を英語で行った。講義は前半を湯浅茂雄(国文学科教授)、後半を村上まどか(英文学科教授)が担当した。

前半の湯浅は、前置きとして学園の創立と教育理念の概要を説明した後、学園を創立するに至るまでの下田先生の生涯を中心に具体的に解説した。下田先生の5つの業績、小説に登場する下田先生、少女時代、岩村から東京への出立(綾錦の歌の紹介)、宮中出仕、桃夭学校時代 華族女学校時代 欧米女子教育視察、帝国婦人協会の設立とその趣旨、実践女学校他3校の創立、清国女学生の受け入れ、などである。東京への出



立の項では、綾錦の歌に表明されているような若き女性の高い志が本学の原点であることを述べ、帝国婦人協会設立の趣旨の項では「揺籃を揺るがすの手は以て能く、天下を動かすことを得」の言葉を紹介し、ここから「女性が社会を変える、世界を変える」という現在の教育理念に活かされていることを述べた。

後半の村上は、下田先生を「歌子」たらしめた歌人としての側面に焦点を当て、幼少期から晩年までの短歌5首を独自に英訳することによって解説した。留学生にもわかるように日本語のリズムや短歌の歴史にも触れ、「綾錦」「春月」「道を伝へむ」といった代表作を自由律の5行詩に詠みなおして紹介した。皇后から「歌子」を賜った逸話はもちろん、歌人・税所敦子との交流を経て歌集『雪の下草』が出版された経緯も語られた。下田先生は、典雅な光景を描写し、強固な意志を表明する短歌を通じて、人々の尊敬を集めていたことがわかる講義であった。

ベイパス大学の学生5名、教員1名は、この講義を熱心に聞きかされていた。質疑応答もあり、興味を深めていただいたようである。「異文化間における女性リーダー比較」のテーマの研修に、少しでもお役に立てたのであれば幸いである。

(ゆあさ しげお 本学教授)



湯浅兼務研究員



実践女子大学言語文化教育研究センター
ブラック・ヨーガン センター長(本学教授)



村上兼務研究員

国際シンポジウム「Family Life Educator による個人・家族・コミュニティの生活支援」



第2部門 兼務研究員

細江 容子

牛腸ヒロミ先生と高橋桂子先生のご尽力により、(社)日本家政学会と実践女子大学下田歌子記念女性総合研究所の後援を得、実践女子大学研究成果公開促進費助成事業として、2018年12月1日(Welcome party)、2日の国際シンポジウム「Family Life Educator による個人・家族・コミュニティの生活支援」を開催することができた。

今日、日本社会では、児童虐待、子どもの貧困、子育て不安、家庭内の不和やドメスティック・バイオレンス、退職後の自立生活への不安、要介護高齢者への虐待等、様々な家族・家庭生活に関わる問題が山積している。これら様々な問題に対し、その問題を改善・解決するために心理学、社会福祉学、法律学などの学問を専攻した専門職による多様な生活支援が行われている。そこで提供されるカウンセリングやセラピー、心理療法、行政の福祉サービス等の生活支援は、そのほとんどが、その問題が発生してからのも事後対応であり、介入、治療、サービス等の開始は自己の申告・申請や通告によってなされることになる(黒川2017 家族関係学 36巻 55-63)。



このような現実を前にして、家政学では、従来の生活支援の方法では救いきれないところに「生活課題の予防と解決を支援する知識とスキルを持つ家政学の知見を生かすべきではないか」との考え方が示されている。すなわちそれは、予防的教育に基づいた知識やスキルの習得を通して問題を回避し、それが深刻化する前に本人や家族が主体的に何らかの対応ができる能力を身につけることの重要性に関する指摘である。それは、社会における個人や家族生活の多様化に伴い、従来の事後対応型の支援では十分に改善されない生活課題に対し、事前に予防教育を行うことを通して実践的に個人や家族をエンパワーメントし生活課題を解決しようとする家政学的生活支援の解決手法である。

家政学は「家庭生活を中心とした人間生活における人間と環境の相互作用について、人的・物的両面から、自然・社会・人文の諸科学を基盤として研究し、生活の向上とともに人類の福祉に貢献する実践的総合科学」(社団法人日本家政学会 1984:32、一般社団法人日本家政学会 2017)と定義されており、生活者の視点で生活を総合的包括的に捉え、研究成果を現実の生活課題との関わりで解決をはかる実践的な学問である。その手法は家族や家庭生活の課題・問題に対し、他の学問領域とは異なる実践的総合的アプローチの仕方を持っているといえる。黒川が述べる様に、実際、家政学を学問的背景とする家庭科教育では、問題解決型学習を取り入れ生活と関



学長のごあいさつ

わる予防教育の観点で教育が行われてきているといえる。

日本では家政学的生活支援を行うことのできる専門家として「家庭生活アドバイザー」の資格を設けその認定が2018年にスタートした。学会の資格認定規程の定めるところによると、その1条(目的)で「『家庭生活アドバイザー』とは、家政学の知識・技能を活用して、人々が生活環境を整え、自ら生活課題を乗り越える力を高めるのを支援し、個人・家族・コミュニティのウェルビーイングの向上のために活動する専門家」と定義する。

このシンポジウムでは、アメリカ National Council on Family Relations (NCFR) で Family Life Educator が資格制度化された CFLE (Certified Family Life Educator) に関して Dawn Cassidy 氏にその成立過程やこれまでの実績に関して、アメリカ NCFR の Family Life Educator 資格 (CFLE =

Certified Family Life Educator) 制度をモデルとして資格化された韓国と台湾の制度や実績に関して、台湾の輔仁大学の陳若琳氏、韓国の大邱大学のチョウ・ヒグム氏に、さらに日本の制度化について、西南学院大学の倉元綾子氏にお話を伺った。さらにその後のパネルディスカッションを基に、この資格に関する日本における今後の発展的展開に向けた質疑・応答等を実施し、大変有意義な国際会議となった。

今回の国際会議は、実践女子大学下田歌子記念女性総合研究所の後援と、実践女子大学研究成果公開促進費助成事業によってその実現が可能となったものであり、この一歩が「家庭生活アドバイザー」とこれからの行動する家政学の発展的展開につながるものと確信している。

(ほそえ ようこ 本学教授)



ゲストスピーカーによる報告



ゲストスピーカーによる質疑応答とディスカッション

「おばあさま」とよばれた淡海高等女学校の塚本さと



藤堂 泰脩

下田歌子、杉浦重剛、嘉悦孝子など中央各界多勢の方の支援をうけ(注1)、大正八年(一九一九)四月近江(滋賀)に発足した淡海女子実務学校(注2)は、塚本さとが商人の妻も時代の教育を受け、知識を高めることを願って新時代の学校を創設した。

西洋文明の流入により、社会変革があったはといえ、明治の頃に「良妻賢母」という女性観は、一朝一夕で変わることなく、今日に至っても「奥様」「ご寮さん」など日常の言葉にその名残がみられる。

さとがそこからもう一步踏み出した女性を考えたのは、自分の歩んできた経験による。自身商家の娘であり十三歳までは「読み」「書き」「算盤」の寺子屋教育をうけたが、この事もこの時代の女性では稀有のことであった。

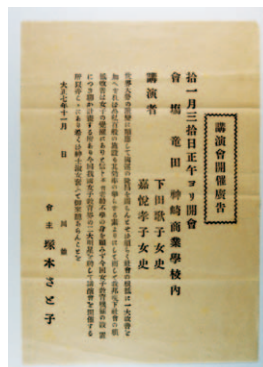
遠く昔から近江商人は「他国商い」として日常各地に店を構えるが、主従共に単身で滋賀に妻子は残すのが慣習で、留守中の涉外(表向き)の事も殆ど妻は主人に代わって委ねられ、加えて地元で店員を募り、教育を授けるなど、諸事後方の業務の役割を担う立場であり(盆、暮、祭等に夫と顔を合わすのが一般的な日常であった)、正に夫と共に車の両輪の立場に置かれている。一例をあげると、新しい戸籍法による申請手続きを一族(注3)の分まで「さと」一人でしたりした。

また電話がこの地に新設されると、早速それを使って東京の夫や兄に京、大坂や諸々を手紙より早い情報手段として利用する等、常に時代に遅れぬ心掛けがあり、帰郷する夫達の中央の話をよく聞きとめていた。

四十過ぎから和歌を習い、下田歌子からも指導をうけるまでになった。下田歌子は歌人であると同時に女子教育の先駆者であり、活動の様子は遠く滋賀のさとの耳に入っていた。

さとは七十七才に隠居の身となって、永年思い抱いていた女子学校をこの地に設立に踏み切った。当然ながら身内や心ある方々にその考えを伝えていたが、師である下田歌子が中心であった。下田もそれに伴い開校準備中の演説会に嘉悦孝子と度々訪れて地域への啓発を行い、多く来会の女性に共感を呼んでいた。

開校に及び杉浦重剛、下田歌子、嘉悦孝子が顧問となり、学校教育の指導にあたっている。その上下田歌子は大正十四年(一九一九)から五年間は老齡のさとに代わり二代目校長となり、その間に教育水準の向上、高等女学校昇格、新校舎を整え、自身の東京実践女学校への卒業生受け入れ制度と、諸事に尽力した。経営基盤の充実にはさとと塚本一族の支援とともに地元有力者の多く参加をみた淡海教育



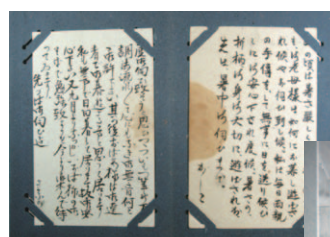
淡海女子実務学校
開校時の講演案内



杉浦重剛 滋賀出身
元東宮、東宮妃教育掛



淡海女子実務学校



卒業生から「おばあさま」への
暑中見舞



淡海女子実務学校開校記念
嘉悦孝子 塚本さと 下田歌子

会をもって、教育、運営共に全国二百余りの女学校中五指に入る優良校となる。さとと下田歌子によって創設されたといっても過言ではない。

さとに話は戻るが、自身創設後も同様であるが、以前の幾多の困難を乗り越えての開校で思いを達していた。

自分の年齢や時代を考えて、新しい教育の指導者を迎えることが念頭にあった。しかし多勢の方の強い要請に幾度も固辞を押し切れ、初代校長の任を受けた。校長就任となり、学校設立の意をもって、授業の中に「商業」科目を週八時限設け、「簿記」等を習得させている。

また自身校長というよりも、教え子の優しい祖母として親近感あふれる「おばあさま」とよばれ、より身近な接し方をした。

初めての修学旅行、生徒と共に夜行の「汽車」で東京に行き、卒業に際しては一人ひとり自宅によんで将来への「論し心得」を話し、和歌を与えて励ましている。

渋谷キャンパスの「香雪記念館」に展示されている下田と嘉悦、さとの三人琵琶湖畔瀬田での舟遊びの図、下田とさとが和歌を作り、嘉悦が席画の絵筆をとったもので三人とも正に「忙中閑あり」。一刻をたのしむ様は、開校やそこに至るまでの二人への感謝の思いのさとの心尽くしであろう。

人生の経験を若者に伝えた「おばあ様校長」と新しい息吹きを中央から近江の人に伝えた下田歌子、そして多く人によって前進した淡海高等女学校で

あった。終わりに二人の和歌でそれぞれの想いを伝えたい。

下田歌子のさとへの挽歌

もろともに 見んと願いし なでしこの
盛りをまでに 行にし君は

さとの和歌 教え子の東京旅行の前途に

学び舎の 庭の若竹 ふしぶしの
風もいとへ はつのがたび



塚本さと生家 現聚心庵

注1 滋賀出身の教育者、東宮及び東宮妃教育掛・嘉悦孝子は現嘉悦大学の学祖

注2 淡海女子高等学校は最終校名。創設時は実務学校そして淡海女子実践学校となり高等学校となる。

注3 塚本さとの本家定右衛門を中心とした五家のブラザーズカンパニー。さともその一家

注4 香雪は下田歌子の号

※ニューズレター No.8 (2017.1)、同 No.9 (2017.6)

も合わせてご参照下さい。

(とうとう ひろのぶ (株)ツカモトコーポレーション
資料館 (社法)聚心庵館長)

隆崇院における平尾家親族の位牌・靈璽について



第1部門 客員研究員
愛甲 晴美

昨年度の本研究所年報第5号において、岐阜県恵那市岩村町の隆崇院のご協力により下田歌子先生(以下歌子)の夫下田猛雄氏(以下猛雄)の位牌(下段挿図の⑥)が発見され、調査報告させていただいた(注1)。

この調査の過程で、同寺で、さら平尾家親族の位牌・靈璽の存在が明らかとなった(注2)。まだ所在不明のものもあり、全貌を詳らかにするには時間を要するが、今回は現時点で所在が確認できた7基について、概要を報告する。

昨年猛雄の調査のために訪れた東京南麻布の光林寺で、猛雄以外に東京で死去した歌子の親族に関して、ご住職の菅原義明氏より、ご所蔵の過去帳の明治十七年六月十七日に「松操院全節安貞大姉 平尾錦藏祖母」、明治三十一年二月十三日に「仁良院義嶽宗信居士 下田哥子實父 平尾録藏」の記載があることをご教示いただいた。これらも実践女子大学図書館下田歌子関係資料「平尾家過去帳」(出納番号2870)にある戒名とも一致し、夫猛雄、祖母貞、父録藏が光林寺に埋葬された裏付けが得られた。

光林寺の過去帳では見いだせなかったが、そのほか平尾家過去帳に光林寺葬となっているのは母房と弟錦藏の次女治子(注3)で、岩村の乗政寺山墓地にある平尾家の墓石裏面には貞、録藏、房、錦藏、治子の戒名が刻まれている。



平尾家親族および猛雄の位牌・靈璽

後ろ右から①平尾家 ②下田歌子 ③下田歌子
手前右から④平尾錦藏 ⑤平尾房 ⑥下田猛雄
⑦平尾家 ⑧平尾録藏

①平尾家位牌

形状：札型位牌 全長：54.0cm 台座幅：17.0cm
牌身長：36.2cm 幅：9.5cm
表：黒漆塗 陰刻の上に金泥
平尾家先祖代々靈位
裏：黒漆塗 陰刻
當(開) 四世文政四辛巳四月廿九日
*□は不鮮明

②下田歌子位牌

形状：札型位牌 全長：45.0cm 台座幅：15.0cm
牌身長：27.0cm 幅：8.5cm
表：黒漆塗 陰刻の上に金泥
蓮月院殿松操香雪大姉
裏：紀年銘なし

③下田歌子位牌

形状：札型位牌 全長：22.0cm 台座幅：11.0cm
牌身長：13.5cm 幅：6.2cm
表：黒漆塗 陰刻の上に金泥
蓮月院殿松操香雪大姉
裏：黒漆塗 朱書
昭和十一年十月八日
薨 俗名 従三位勲三等
下田歌子
行年 八十三歳
台座裏に「東京青山南町三ノ一 積善社謹製」とあり



③表・裏

④平尾錡藏靈璽

形状：靈璽 白木造 蓋付
 全長：17.0 cm
 台座幅：12.0 cm
 本体長：15.0 cm
 幅：6.5 cm
 表：墨書 平尾錡藏之命
 神靈



④蓋付表・裏

裏：墨書 大正十二年四月二十一日歸天 享年六十有四

⑤平尾房靈璽

形状：靈璽 白木造 蓋付
 全長：16.0 cm
 台座幅：7.5 cm
 本体長：14.3 cm
 幅：4.2 cm
 表：墨書 平尾房子靈
 裏：墨書 明治三十八年
 六月二日歸幽



⑤蓋付表・裏

⑦平尾家位牌

形状：札型位牌
 全長：15.0 cm 台座幅：6.5 cm
 牌身長：10.5 cm 幅：4.1 cm
 表：黒漆塗 陰刻の上に金泥 平尾家世々靈位
 裏：紀年銘なし

⑧平尾録藏位牌

形状：札型位牌
 全長：15.0 cm
 台座幅：7.5 cm
 牌身長：10.5 cm
 幅：4.5 cm
 表：黒漆塗 戒名上部に家
 紋 陰刻の上に金泥
 仁良院義嶽宗信居士
 裏：黒漆塗 朱書
 明治三十一年二月十三日卒 平尾録藏 享年八十一



⑧表・裏

①②は、すでにその存在が知られている。

①の裏面に文政四年とあることから、この位牌は歌子の曾祖父平尾錡藏信順の頃のものである。明和4年11月生まれの錡藏はこの時53歳で、岩村での平尾家四代目にあたる(注4)。

②は以前より、歌子の法要の際に祀られてきたが、製作年は明らかでない。

③の位牌台座裏に記された積善社は、当時の電話帳に仏師・仏具商として掲載されている(注5)。歌子の自宅があった青山北町六丁目に近い店であることから、おそらく東京の葬儀の際作られたのであろう。

④は神道の靈璽である。靈璽は仏教における位牌に相当する。錡藏は平尾家過去帳には「天璋院徳誉良道居士、岩村町隆崇院葬」とある。

⑤も靈璽である。④⑤ともどのような経緯で隆崇院

に安置されたのかは明らかでない。墓石には房の戒名「春月院光譽妙智大姉」があるが、過去帳には「房子靈位」となっている。

⑧の録藏の位牌の戒名は義が旧字ではあるが、平尾家過去帳、墓石とも一致する。戒名上部の家紋は、一つ引両紋だが、外円と中の引両(横線)左端の間にわずかに隙間が見られる。平尾家の家紋については、「丸之内 三ツ星 抱茗荷」とあることから(注6)、「丸之内」が「丸の内に(太)一つ引両」に相当するのであろうか(注7)。新田氏族が一つ引両紋を用いたということも、平尾家の祖先を考える上で興味深いが、平尾家の家紋については今後さらなる調査が必要である。

下田歌子先生の三回忌に、岩村の乗政寺山墓地に新たな墓所が造られ、光林寺に葬られた親族も平尾家の墓所に改葬されてすでに80年が過ぎた。今年は本学園創立120周年の記念の年であるが、この節目の年を迎えるにあたり、学祖の親族の位牌や靈璽の存在が明らかになったことに深い感慨を感じる。まだ解明されていない点多々あるが、今後も調査を進めていければと考えている。

猛雄の位牌を含め今回の調査にあたっては、隆崇院先代住職桂芳彦氏、現住職桂啓輔氏、光林寺住職菅原義明氏、本研究所客員研究員鈴木隆一氏、若森慶隆氏に格別のご高配とご教示を賜った。心より感謝申し上げます。



隆崇院先代住職 桂芳彦氏(左)
 現住職 桂啓輔氏(右)

注

- (1) 拙稿「下田猛雄について—附：下田猛雄位牌調査報告—」実践女子大学下田歌子記念女性総合研究所年報第5号 2019年
- (2) (1)において、新たに確認されたものをすべて位牌としていたが、母房と弟錡藏のものは靈璽の誤りであり、訂正する。
- (3) 治子は歌子の姪で本学の理事長、二代目校長であった平尾壽子の妹に当たる人物である。平尾家過去帳によれば明治41年数え年4歳で亡くなっている。
- (4) 『岩村町史 史料編 近世 岩村藩藩士歴世略譜 上』岩村町教育委員会 1992年
- (5) 『東京横浜近県職業別電話名簿』昭和9年、昭和12年用 長田源一編 日本商工通信社 1934年、1936年
- (6) (4)に同じ
- (7) 『日本家紋総鑑』千鹿野茂著 角川書店 1993年

(あいこう はるみ 本研究所客員研究員)

実践の現代史・ナラティブ（語り）

戦後の実践の歩みを知るために、本研究所では卒業生や教職員に聞き取り調査を行うことになりました。題して「実践の現代史・ナラティブ（語り）」。

卒業生や教職員の体験をうかがうことで、実践の過去と今をつないでいきたいと思えます。第1回目は、短期大学を卒業後、43年間実践に勤務された大和恵子さんです。



■ 大和恵子氏 インタビュー

プロフィール：

1969(昭和44)年4月 実践女子短期大学国文科入学／1973(昭和48)年1月～2014(平成26)年3月 学生課、企画課、総務部(庶務課)、進路・就職課、総合企画部などに勤務／2014(平成26)年4月～2016(平成28)年3月 参事 (やまと けいこ)

——大和さんが実践の短大に入学された1969年は、今と違って女子の大学進学率は低く、4年制大学5.8%、短大10.3%でした。なぜ実践の短大に入学されたのですか。

私は山形の出身なのですが、山形でも国文だったら実践というように知名度が高かったのです。都会の文化的な世界への憧れもありました。母に「教員にならないなら短大で充分」と言われ短大に進みました。入学した年が創立70周年で、上京してすぐの常陸宮妃殿下をお迎えした武道館での式典が印象に残っています。

当時女性は一定程度勤めた後、結婚して家庭に入るのが当たり前でした。短大の方が少し長く勤められるので就職率が良かったのです。それが短大人気に繋がっていたと思います。

実際、銀行が短大に来て採用試験を行ったり、女子短大で、就職率が全国1位になったこともありました。当時の学生数は今より多く、国文科は1学年90人クラスが2クラスありました。

——当時の学生の雰囲気はどうでしたか。

「いいところに就職するには実践ぐらい出ておかなくてはね」とか、「お嫁さんにするなら実践」というようなことが言われていました。大妻、共立、実践は「良妻賢母」の女子大学と見られていたと思

います。実践の学生は、トップに立たなくても、企業からは、この人がいてくれると仕事も確実に安心できると評判が良かったのです。「掛け替えのないナンバー2」というような評価がされていたと思います。堅実ででしゃばらないタイプの女性が多かったのではないのでしょうか。そのせいか、私の世代よりもっと上の世代になりますが、政治家や学者、地方の方が名家に嫁ぐことが多かったようです。

——なぜ実践に就職したのですか。

短大を出てから2年ほど書道家の内弟子になりました。日本書道美術院を創設した飯島春敬先生の奥様で、かな書で著名な飯島敬芳(重子)先生が実践に講師として来られていたのです。小学生から書道を始め芸事が好きだったので、書道で身を立てるのも良いかなと。生意気に技を芸に高めるには精神修養が必要と思っていたので、内弟子を申し出たところ快諾してくださったのです。ですが、実際に書道で生きていくのは難しいということがわかり、次の就職先はいろんな面で様子がわかる母校に出来たらと考え、連絡を取ったところ、たまたま職員を募集していたということで、面接していただき採用になりました。当時、職員は一般公募ではなかったので採用試験もなく、とてもラッキーでした。



<インタビュー風景>



<平尾家墓所開眼法要 集合写真>

——女性は結婚したら仕事を辞めるのが当たり前だったということですが、なぜ仕事を続けたのですか。

結婚したとき、経済的な理由で、夫に「仕事を続けて欲しい」と言われました。続けられたのは学校という職場が当時のはのんびりしていて居心地が良かったからです。勤務は朝9時から夕方4時まででした。勤め始めた頃は、学生の夏期休暇中の職員の出勤は1週間～10日ぐらいで、こんなに休んでお給料をいただいて良いのかしらと思いました。

今と違ってパソコンのない時代でしたから、仕事のペースがゆっくりでしたね。それが少しずつ忙しくなっていたのですが、特にパソコンが一人1台導入されるようになってから、ずいぶん働き方が変わりました。

——大和さんはどんな業務をなさっていたのですか。

学生課、企画課、総務部（庶務課）、進路・就職課そして最後は総合企画部でした。企画課の時、日野校舎建設工事に関わりました。1985（昭和60）年、大学が日野に全面移転するのですが、当時は、大学の郊外移転ブームで、郊外に出て広い敷地を手に入れることは大学が発展すること、というようにみんな考えていたので、「移転反対」といった声はほとんどなかったと思います。

平成に入り庶務課（秘書室）勤務に。当時学長の分銅惇作先生や秘書室の先輩方にもお世話になったので、思い出深いですね。進路・就職課時代、2004（平成16）年に短大勤務になりました。私の短大時代と学生の雰囲気があまりに変わっていて驚きました。

——下田先生を伏せた時代と平尾壽子（かずこ）先生のお墓についてお聞かせください。

2006（平成18）年に、平尾先生と蓼沼先生のことを聞き取り調査したことがありました。平尾先生は下田歌子先生の姪御さんで、下田先生の後の2代目と4代目の理事長をなさった方です。7代目理事長の蓼沼繁枝先生は茶道関係で平尾先生が連れて来られたと伺っています。蓼沼先生が理事長になると、下田先生を慕う平尾先生派と対立関係が起きました。同窓会も二つに分かれて、それぞれ本堂と庫裡で下田先生のご命日法要をするということもあったそうです。その後、1652（昭和27）年から蓼沼先生が理事長時代の約20年間、実践が創立者の下田先生を学園内外に謳わない時代がありました。それでも、学生募集には支障がなかったようですが。私たちの世代は、下田先生について学生時代にはほとんど何も教わっていません。津田塾などとの大きな違いです。残念なことだと思います。

平尾先生は1986（昭和61）年に亡くなり、故郷岩村の平尾家墓地に埋葬されますが、埋葬したとされる場所には墓石がなかったため、お骨がどこに埋められているか分からないような状態でした。私はそのことがずっと気がかりだったのですが、下田先生の研究者で当時学長の湯浅先生にご相談し、井原理事長の決断で平尾家墓地の改修工事が行われ、きちんと改葬して下さったことで安心しました。

聞き手：広井多鶴子 所長

湯浅 茂雄 兼務研究員

於：渋谷キャンパス 120周年記念館 17階
会議室3、2019年3月11日

新編下田歌子著作集『結婚要訣』

(専任研究員 久保貴子校注・解説) 刊行



久保 貴子

下田歌子が、生涯において残した著作の数は、同時代の女性の書き手の中でも群を抜いています。そのいずれも力作で、一冊一冊に独自の興味と揺るぎない主張があり、文筆面での多才な活躍にも瞠目するほかありません。しかし、その著作は現在絶版となったものが多く、一般の方が目にする機会はほぼありません。女性の一層の活躍が求められる現在において、日本の女性の生き方を真摯に考えた下田歌子の多くの著作は、改めて読み直す価値があると言えます。

本研究所では、その中でも現代の日本の社会に資するところが大きいと判断される著作を選び、「新編下田歌子著作集」と銘打って出版事業を行っています。『婦人常識訓』『女子のつとめ』(現代語訳)、『女子の心得』、それに続く1冊として2018(平成30)年度には4冊目となる『結婚要訣』を刊行しました。およそ1世紀の歳月を隔てた現代の読者に供するにあたって、典雅な和文で著される原文を尊重しつつも、文語調で読みにくい部分には注を施しました。わかりやすくなった「新編著作集」を通して、あらためて

下田の言葉に触れ、現代さらには未来の女性を考える糧にさせていただきたいと思います。

『結婚要訣』の原本は1926(大正5)年11月、三育社から刊行されており、下田歌子はその活動範囲を一般女子のための教育活動へと拡大して活発な活動を行っていた時期の著述です。「新編著作集」の「帯」に、「西洋との比較をまじえた結婚の歴史や現在の実用性にもかなう話題を豊富に伝える大正期に書かれた「結婚大全」と的確に記されるように、至れり尽くせりの内容は「結婚」をめぐる百科事典としての性格ももっています。現代の同趣の書籍、雑誌に繋がるものも見出せるでしょう。これは、出版物を通してより広い層に「女子」さらには結婚後の「主婦」「母」に自らの信じる考えを示したいという下田の思いのあらわれでしょうし、また下田の著述に対する読者側の需要が高まった結果とみることも出来るでしょう。

何よりも本書を貫く、明晰にして生き活きとした語りの文体は眼前に下田の肉声を聞く思いがします。一つの時代の「結婚」をめぐる言説として、文化史として、さらには現代の「結婚」を照らし出す鏡として新たな眼で読み直してみる価値があるように思われます。

以下、本書の「目次」を掲載することで、その威容を紹介します。なお、2019(令和元)年度には『良妻と賢母』の刊行を予定しています。

(くぼ たかこ 本学専任講師)



(四六版、348頁、三元社、2019・3・31発行、本体3400円+税)

『結婚要訣』- 目次 -

- 緒言
- 第一章 緒論
- 第二章 結婚の沿革
- 第三章 内外結婚の異同
- 第四章 許嫁
- 第五章 配遇の選擇法
- 第六章 血族及び異人種結婚の當否
- 第七章 現代に行はれつゝある婚姻
- 第八章 適當なる結婚の方法と夫妻の覺悟
- 第九章 現今の婚禮式及び其の手續
- 第十章 離婚
- 第十一章 再婚
- 第十二章 結論



『結婚要訣』三育社、1926(大正5)・11

研究所の活動紹介

詳細は、本研究所 HP でお知らせいたします。随時ご覧ください。(https://www.jissen.ac.jp/shimoda/)

講演会などのお知らせ



男女共同参画時代の女子大学のミッション

「女性リーダー育成の可能性」共催 [主催：実践女子大学生涯学習センター]

日 時：2019年7月20日(土) 13:00～16:00

場 所：渋谷キャンパス(創立120周年記念館)5階502教室

司 会：広井多鶴子(実践女子大学)

登壇者：安東 由則(武庫川女子大学)
石井クンツ昌子(お茶の水女子大学)
谷内 篤博(実践女子大学)



メンズ・キッチンカレッジ2019@日野キャンパス

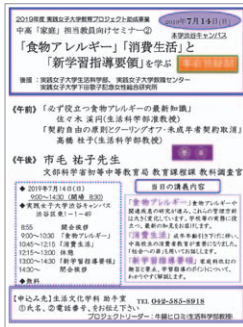
[日野キャンパス、教育プロジェクト助成事業(プロジェクトリーダー：高橋桂子)]

日 時：2019年7月13日(土)、9月14日(土) 10:30～14:30

場 所：日野キャンパス 本館1階 調理実習室(費用：500円)

指 導：数野千恵子(食生活科学科)

企 画：高橋 桂子(生活文化学科)



中高「家庭」担当教員向けセミナー②

「食物アレルギー」「消費生活」と「新学習指導要領」を学ぶ

[渋谷キャンパス、教育プロジェクト助成事業(プロジェクトリーダー：牛腸ヒロミ)]

日 時：2019年7月14日(日) 9:00～14:30

場 所：渋谷キャンパス(創立120周年記念館)6階604教室

講 師：佐々木溪円(食生活科学科)

高橋 桂子(生活文化学科)

市毛 祐子(文部科学省)

活動報告

岩村歴史資料館 「下田歌子と岩村」展示協力

[主催：恵那市市役所生涯学習課]

日時：2019年4月23日(火)
～6月2日(日)



恵那市中央図書館「ふるさとギャラリー 先人顕彰 下田歌子の生涯」展示協力

[主催：恵那市市役所生涯学習課]

日時：2019年4月26日(金)
～5月23日(木)



第2部門第1回研究会

日時：2019年6月5日(水) 16:45～18:15

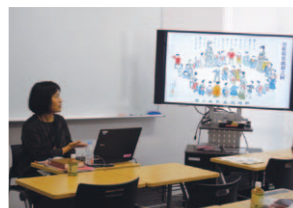
場所：渋谷キャンパス(創立120周年記念館)5階506教室
研究発表：

『「新選家政学 下の巻」第一章 小児教養』

松田 純子(生活文化学科)

「英国ケンブリッジ大学女子学寮と

International Women's Day」 志渡岡理恵(英文学科)



常磐祭で展示会を開催します

渋谷キャンパス

【日時】 2019年10月12日(土)、
13日(日) 10:00～16:00
【場所】 渋谷キャンパス
創立120周年記念館 7階 703教室

日野キャンパス

【日時】 2019年11月 9日(土)、
10日(日) 10:00～16:00
【場所】 日野キャンパス
本館 3階 362教室

実践女子大学 下田歌子記念女性総合研究所
2019年度 研究員一覧

広井多鶴子 (所長)

第1部門

久保 貴子 (専任研究員)

高瀬真理子 (第1部門長・兼務研究員・日本語コミュニケーション学科)
湯浅 茂雄 (兼務研究員・国文学科)
神木まなみ (兼務研究員・現代社会学科助手)
小林 修 (客員研究員・本学名誉教授)
宮木 孝子 (客員研究員・日本語コミュニケーション学科非常勤講師)
関 登美子 (客員研究員・本学園中学校高等学校)
松下 寿久 (客員研究員・本学園中学校高等学校)
愛甲 晴美 (客員研究員・福生市立中央図書館)
鈴木 隆一 (客員研究員・本学園恵那市・岩村町親善大使)
竹内 整一 (客員研究員・鎌倉女子大学学術研究所)
中西 達治 (客員研究員・金城学院大学名誉教授)
若森 慶隆 (客員研究員・いわむら一斎塾)

第2部門

高橋 桂子 (第2部門長・兼務研究員・生活文化学科)
深澤 晶久 (兼務研究員・国文学科)
村上まどか (兼務研究員・英文学科)
志渡岡理恵 (兼務研究員・英文学科)
織田 涼子 (兼務研究員・美学美術史学科)
数野千恵子 (兼務研究員・食生活科学科)
牛腸ヒロミ (兼務研究員・生活環境学科)
細江 容子 (兼務研究員・生活文化学科)
松田 純子 (兼務研究員・生活文化学科)
須賀由紀子 (兼務研究員・現代生活学科)
清田 夏代 (兼務研究員・教職センター)
駒谷 真美 (兼務研究員・人間社会学科)
山根 純佳 (兼務研究員・人間社会学科)

皆様の思い出をお譲りください

実践女子学園は、2019年に創立120周年を迎えました。本研究所では、学園や下田歌子先生の事績がわかる資料収集に力を入れております。

卒業アルバムや当時使っていた教材やノート、学生生活や校舎の写真など、ご寄贈可能なものをお持ちでしたら、本研究所までご連絡ください。創立120周年の歴史を未来へ繋げるために、ぜひご協力ください。

◆資料ご寄贈の手順について◆

資料の受け入れに当たっては、その可否を判断させていただくことがございます。御送付の前に予めご連絡をお願いいたします。お送りいただきました資料の返却は、受入のいかんにかかわらずご容赦いただいております。次の手順についてご理解の程何卒よろしくお願い申し上げます。

(1) 送付いただく前に、下記にご連絡ください。

連絡先 実践女子大学 下田歌子記念女性総合研究所
電話&FAX：042-585-8945 Mail：shimoda-ins@jissen.ac.jp
受付時間：8:45～17:00 ※土日祝祭日を除く

(2) 本研究所にご連絡の後、①～④をご記入いただき、荷物(郵便、宅急便)にご同封ください。

- ① 卒業された年月、学科 ※覚えていらっしゃる範囲でお願いします。
- ② 卒業生のお名前(在籍された当時のお名前)
- ③ ご提供いただく方のご連絡先(電話番号、住所)とお名前
- ④ ご寄贈いただく資料や思い出のお話
※複数ある場合は、リストも添付いただくと助かります。

送り先

〒191-8510 東京都日野市大坂上4-1-1
実践女子大学 下田歌子記念女性総合研究所